

タイトル	「大衆」の居場所 オルテガ『大衆の反逆』を読む
著者	犬飼, 裕一; INUKAI, Yuichi
引用	北海学園大学学園論集(148): (1)-(20)
発行日	2011-06-18

「大衆」の居場所

オルテガ『大衆の反逆』を読む¹

犬 飼 裕 一

1. オルテガ『大衆の反逆』

「大衆社会論」という分野がある。共通する特徴としては、「大衆」と呼ばれる人間類型が登場して社会の主導権を握る状況について考察を加える点にある。論点としてはかなりの普遍性があり、近代化した社会全般にあてはまる問題に接続できる。とりわけ「大衆」という概念をあいまいにしたまま議論を進めていくと、ごく一般的な政治談議にも応用できる。ただし、この「大衆」という概念を多少なりとも明確に定義しようとするといういろいろな困難が起こってくる。

とりわけ大衆社会論が最初に名声を博した二〇世紀初頭のヨーロッパの場合と、今日の、いわゆる「グローバル化」社会の場合とでは、おのずから状況が異なっている。初期の大衆社会論にとって「大衆」とは、明らかに外部にある他者としての存在である。著者たちは自分が大衆だとは思っていない。これに対して二十一世紀の世界で「大衆」を外部に置くことは、不可能ではないかもしれないが、

不自然になりつつある²。とりわけ消費生活にあつては、今日の論者たちも例外なく「大衆消費財」の恩恵に浴している。知的生活にあつても「大衆メディア」に登場する話題が、「知識人」と呼ばれる人々の仕事を先導する。あるいは、大衆メディアが彼らを起用して大衆消費財としての知識を日々生産させている。

何より大きな違いは、「大衆」について何らかの命題を立てた場合、「そういう自分はどうなのか？」という自己言及³の問いが、ごく自然に立ち現れてくることにある。超然とした様子で「大衆」の生態を観察するといった態度は困難である。この結果、大衆社会論は、論者自身をも含んだ議論とならざるをえない。議論を整理していえば、「大衆」をめぐる議論は自分自身についての議論、つまり自己言及性から逃れられなくなりつつあるのである⁴。

そんな状況を視野に入れて、誰もが知っている大衆社会論の古典、あるいは代表作とみなされる著作を丁寧に読んでいく作業は、得るものが少なくないに違いない。それは、同じ言葉で表現されている内容が次々と移り変わっていく状況を実感する機会であり、また、

なぜ「大衆」をめぐる議論が変化してきたのかを知るきっかけとなるとも考えられる。ここで取り上げるのは、オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』（神吉敬三訳、ちくま学芸文庫一九九五年、原書刊行一九三〇年）である。

より具体的にいえば、オルテガが考えている「大衆」と、今日の人々が一般的に想定する「大衆」の間に何らかの相違があるならば、まさにそれこそが二〇世紀を通して起こった知識世界の変動を明らかにする手がかりとなりうると思えられるからである。それは、「大衆」という概念を通して見えてくる著述家——知識人——の立ち位置の変化を観察する仕事である。もちろん、それは古い時代の著述家が享受していた特権的で、しかも比較的自由な立場を体験することでもある。オルテガは一九三〇年のこの本の冒頭で次のように書いている。

「そのことの善し悪しは別として、今日のヨーロッパ社会において最も重要な一つの事実がある。それは、大衆が完全な社会的権力の座に登ったという事実である。大衆というものは、その本質上、自身存在を指導することもできなければ、また指導すべきでもなく、ましてや社会を支配統治するなど及びもつかないことである。したがってこの事実、ヨーロッパが今日、民族や文化が遭遇する最大の危機に直面していることを意味しているわけである。こうした危機は、歴史上すでに幾度か襲来しており、その様相も、それがもたらす結果も、またその名称も周知のところである。つまり、大衆の反逆がそれである。」（一一頁）

もちろんここで最初に気づくことは、この著者が「大衆」を自分自身とは切り離された人間類型として考えていることである。ここに一九三〇年に書かれた思想書——あるいは、広義の学術文献——の

著者が考える自らの立ち位置を推測することは無駄なことではない。

それは学術的な著述を行う人物が特別な存在であり、社会の多数派とは異なった地点から発言することが可能なのだという信念に基づいた立場である。多少言い方を変えれば、「自分（たち）」は特別な存在なのだ」という考えを暗に言明しているともいえる。この種の特権意識や選民意識が今日の少なくとも日本社会で高い評価を得るものではないことはいうまでもない。むしろ、ひどく不評であるというべきだろう。

ただし、ここで論じたいのは、八十年前の著者が抱いていたエリート意識を今日の視点から非難することではない。むしろ、重要なのは、八十年前には自明のこととして取り扱われていた前提が、今日ではそうではなくなっている、その原因である。あるいは、「原因」という言葉が誤解を招きやすいつくするならば、漠然と「社会的背景」と言い換えてもよいだろう。ともかく、八十年前のオルテガと、今日では、著者たちに共有されている価値観の変化が、「社会」を背景として生じているからである。

それでは、オルテガはどのような根拠をもって自分自身を「大衆」から区別するのだろうか。実は、これこそが『大衆の反逆』という本を読んでいく際、個人的な関心の中心にあった問いである。わかりやすくいえば、自分は「大衆」ではないと自信をもって明言できるまさにその根拠があるのならば、そしてその根拠に何からの意義が今でもあるのならば、ぜひ教えてほしいからである。先に述べたように、今日「大衆」を外部に置くことは難しい。自ら大衆消費財

を愛用している著者が、どうやって自分を切り離すことができるのか。どうやって逃れるのか。できるものならば、やってほしい。これが素朴で正直な感想だからである。

ただし、この本を普通に読んでいく限り、オルテガが明確にこの問いに答えている場所はない。もちろん、このことは非難には値しない。この著者はその種の課題を掲げていないからである。おそらく、当人にとっては自明のことで、あえて考える必要すらなかったのだろう。しかし、その一方で、オルテガが念頭に置いている考えは、この本を通読していく中で理解できるようになる。それは、ヨーロッパ近代にあつて理想として掲げられてきた「自由な知識人」という考えである。これは「知識は人を自由にする」という古くからの言い方につながっていく⁵⁾。

知識によって自由になった知識人は、「大衆」からも自由になることができるということになる。ところが、オルテガの考えでは、知識人が自由でいられる状況は、次第に失われつつある。まさに、これこそが『大衆の反逆』の主題なのである。とりわけ自由が失われつつあるのは日常語でいうところの「科学者」である。「大衆」が支配する社会にとって「科学者」とは、要するに大衆の欲望をかなえる新しい技術を開発する人々である。彼らは、実用性を何よりも求められ、多くの人々にとって不要不急に思われる研究は制限させられる。

オルテガは第一次世界大戦の結果、科学者が「新しい賤民」に変えられてしまったという(一一九頁)。つまり、真理の探究といった自由で高邁な理念を忘れ、総力戦が必要とする技術を、金(研究費)

と引き替えに差し出す従属的な存在になってしまったのだのである。実用の学、実学への志向は、知の隷属化につながるのだという信念が背後に控えているのだろう。これに対して、「科学者」は多くの科学者とは一線を画しているのだという。

「哲学者は大衆の擁護も必要としなければ好意も同情も必要としない。哲学は自己を完全に無益なものに見せかけ、そうすることによって平均人に対する一切の屈従から自己を解放しているのである。哲学は自己自身が本質的に未確定なものであることを知っており、善良な神の小鳥としての自由な運命を喜んで受け入れ、誰に対しても自分のことを気にかけてくれるよう頼んだりもしなければ、自分を売り込んだり、弁護したりもしないのである。哲学がもし誰かの役に立ったとすれば、哲学はそれを素直な人間愛から喜びはする。しかし哲学は他人の役に立つために存在しているのではなく、またそれを目指しても期待してもいけない。哲学は自己自身の存在を疑うところから始まり、その生命は自己自身と戦い、自己の生命をすり減らす度合いにかかっているのであれば、どうして哲学が自分のことを真剣にとりあげてくれるよう要求することがあるのか。」(一一九頁)

哲学は役に立たないから役に立つのだ。これ自体はとりたてて珍しい議論ではない。古代ギリシアの哲学者が「スコレー」、つまり暇を称揚したのは、生きていくための労働から離れて自己の魂と向き合うことこそが最も高貴な精神の営みだと考えたからである。「スコレー」は英語の school の語源であり、学問の営みはそこから出てきたのだという話も、毎度おなじみである。

ただし、多少読み方を変えれば、「哲学」を社会や社会生活の外部に確保しようとしているとみることもできる。つまり、哲学というのはそれ自身で自律した知の営みであり、人々の社会生活から切り

離された場所で成り立ちうるのだと主張することで、哲学と哲学者が外部から人間社会を論じる根拠を確保しようとしているとも考えることができると。つまり、少なくとも哲学者は、「そういう自分はどうなのか？」という問いに対して、自分は「本質的に未確定」な存在で、「自由な運命」を望んで引き受けた「神の小鳥」なのだというわけである。そして、この場合の「自由」や「自由な運命」とは、自ら設定した価値基準に従って行動し、生きていくことである。つまり、自分の生を評価するのは、自分が定めた基準なのだというわけである。自分を律するのは自分が決めた基準だけであるならば、確かに自由であるといえるだろう。

哲学の自立性という考えは、ただし、微妙な問題を含んでいる。端的に言えば、外部の何ものにも判断できない営みは、結局のところ独りよがりの妄想のようなものであって、確固とした根拠に基づく学問的な議論に寄与するものなどないのではないか、という疑問にいかにか答えるのかということである。言い換えれば、それ自身以外の何ものにも依存しない知の営みというのは存在できるのかということもできる。このことは、とりわけ実証主義的な志向をもった読者が非難する性質である。実証主義には、理論や命題の外部に存在する事象に対してなんらかの働きかけをしない知の営みを、無駄な言葉遊びでしかないと見なす傾向がある。外部に働きかけない議論は循環論であり、何ものをも論証しない命題であり、文学作品であり、詩人や宗教学家、哲学者——そして、「神の小鳥」の妄想の産物でしかないのだというわけである。

ただし、それ自体以外の何者にも依存しない知は、そのことによつ

て存在意義を否定されるものではない。むしろ、自律し、それ自体を根拠として自己産出する言語の営みとして捉えるならば、あるいは特定のテキストを書いている著者自身とは異なった次元で可能性を見つけ出すことが可能になることもありうる。後段の議論を先取りすることになってしまいが、私見では、オルテガの『大衆の反逆』のような文献は、それが書かれた時点で著者が考えていたことをそのままなぞることも増して、今日の読者がいかに読むのかという視点で解釈した方が興味深いように思われるからである。とりわけ、オルテガの「哲学」がどのような仕組みで自己産出しているのかを考えることは、個人的に興味をそそる問題である。ただし、そのためにはいくつかの問題を確認しておかなければならない。

2. 一九三〇年の大衆社会

オルテガの『大衆の反逆』は、この内容の書物が一九三〇年に刊行されているという点で、すでに特別な文献なのである。スペインでは、一九三一年にボルボン王朝（スペイン・ブルボン朝）が倒れ、第二共和制が開始される（「スペイン革命」と呼ばれることもある）。そして、一九三六年には右派による反乱が起り、やがてフランシスコ・フランコによる政権が成立し、いわゆる「人民戦線政府」が最終的に敗北するのが一九三九年である（スペイン内戦）。フランコの勢力を支援したのが、すでに一九二五年に政権についていたムッソリーニ政権のイタリアと、一九三三年に政権についたヒトラー政権のドイツである。ムッソリーニの創案による名称で、これら三つの政権による体制は、「ファシズム」と呼ばれてきた。これに対して、

敗北した「人民戦線政府」を支援したのが、一九一七年の「十月革命」を経て一九二二年に旧帝政ロシアの版図に建国した「ソビエト連邦」と、各国のソビエト政権支持者たちである。こちらは、当事者たちの自称に基づいて「共産主義」あるいは「社会主義」と呼ばれてきた。スペイン内戦の時期は、ちょうどスターリンによる「粛清」の絶頂期にあたる。つまり、スペイン内戦は、ファシズムと共産主義という二つの独裁体制——あるいは全体主義——の代理戦争という性格をもっていた。もちろん、スペイン内戦は、一九三九年にはじまる第二次世界大戦の「前哨戦」と呼び習わされてきた。

全体主義が猛威をふるい、やがて内戦や「世界大戦」に向かっていくスペインとヨーロッパにあつて、一九三〇年にオルテガの本が出ていることは、この本を意味深くしている。当時のヨーロッパ、特に内戦前夜のスペインでは、種々の大衆運動が勢力を伸ばし競合状態にあつた。

「ヨーロッパに、数年前からいろいろと「奇妙なこと」が起り始めているのは、誰でも気づいているところである。こうした奇妙なこととのほんの具体的な一例として、サンディカリズムとファシズムのようなある種の政治的動きをあげてみよう。それらが奇妙に見えるのは、それらが新しい運動にすぎないからだというようなことはいつていただきたくない。ヨーロッパ人における革新への情熱はまったく生得的なものであり、それはヨーロッパ人をして今まで知られている中で最も動揺の激しい歴史を生み出さしめるにいたつたほどである。したがつて右のような現象の奇妙さをその新しさに帰すべきではなく、それら新事態のもつきわめて珍しい風貌にこそ帰すべきなのである。サンディカリズムとファシズムという表皮のもとに、ヨーロッパにはじめて理由を示して相手を説得することも、自

分の主張を正当化することも望まず、ただ自分の意見を断固として強制しようとする人間のタイプが現われた。実はこれが新奇さなのである。つまり、正当な理由をもたぬ権利、道理なき道理がそれである。私はこの事実の中に、能力をもたずして社会を指導しようとする決心してしまった大衆の新しいあり方の最も明瞭な現われを見るのである。」（一〇二—一〇三頁）

オルテガは当時のヨーロッパ社会で生じている現象を「奇妙なこと」と呼ぶ。その後の歴史を知る者にとつては周知のことでも、その時点での当事者にとつてはそうではない。『大衆の反逆』が一九三〇年に書かれた本として興味をそそるのは、種々の「大衆運動」が勃興しつつある状況の下、当時の知識人が何を考えていたのかを知ることができるからでもある。

今日、「歴史」を語る修辭（レトリック）を多少なりとも子細に観察すると、過去を善悪あるいは優劣二元論で理解する習慣が染みこんでいることを思い知らされる。「戦勝」という形で決着がついた史実についてはなおさらで、敗北した側は、彼らが常用した言葉まで含めてすべて愚劣な悪者であるということになる。逆に、勝利した側はあらゆる残酷性や愚劣さまで含めて正当化される。要するに「勝てば官軍」。いったん定着した善悪優劣二元論は、次の勝敗まで固定される。とりわけ、イデオロギーとプロパガンダに彩られた二〇世紀は、まさに言葉の闘争の世紀であつたといえる。増長した自意識と悔恨の共同体が同時に生じる。

逆にいえば、「歴史」について考えるということは、歴史に染みこんだ修辭の落とし穴を慎重に避けていくことでもある。その際に、最も参考になるのは、「結果」を知らない当事者が何を考えていたの

かということである。たとえば、オルテガがこの本を書いている当時、「ファシズム」というのは、大勢の支持者が大声で連呼する誇らしい自称であった。そして、これを指して一九三〇年の著者が「奇妙なこと」と呼び、「能力をもたずして社会を指導しよう」と決心してしまった大衆の新しいあり方」と見なすことには、二〇世紀後半以降の人々が言葉を尽くして中傷することよりもはるかに重みがある。ただし、「歴史」を同時代人として体験したオルテガの議論が意義をもつのは、全体主義の同時代人の証言としてだけではない。

先に引用してきたように、「哲学」は、オルテガにとって「自由な運命」を引き受けた「神の小鳥」であるとされる。哲学者は、同時代を生きる人々の価値観から距離を置き、時代の要請にあえて応えないことよって自由であろうとする。彼らは、当時のヨーロッパ社会で起こりつつある「奇妙なこと」の群れからもまた「神の小鳥」でありつづけることができるのだろうか。もしもそれが可能であるならば、どのような根拠によつて可能にできているのか。是非とも知りたいところである。

この本を慎重に読んでいくと、二〇世紀前半に隆盛を極めた「大衆運動」が、同時代人にとつてすら、すでにかなりの確に把握されていたのではないのかという印象がわいてくる。それは、「大衆」が知識人とは異なつた方法で社会問題を一気に解決しようとする運動であった。その方法とは、当時の言葉で言えば「直接行動(英語 direct action 他)」。各種の集会を催し結束を誇示し、街頭に出て反対者を糾弾する行動であり、その場合には各種の乱闘事件も含まれる。また、あらゆる使用可能なメディアを利用して自派の立場を連呼する

ことでもある。その場合、重要なことは誰にでもわかる言葉で主張することであり、繰り返すことである。過去の自分たちの発言を省察することでもなければ、敵対する立場の見解に耳を傾けることでもなく、難解な用語で緻密な議論を組み立てることでもない。

確かにこの種の運動はその時代の知識人にとつて異様なものとして認識されていた。オルテガが文字にしているのは、この異様なものの印象であり、それが「いまこで」生じているという同時代の実感なのである。何度も引用、孫引きされて半ば一人歩きしている以下のような短文も、当時の「運動」について言っているのだと解することができると。

「今日の特徴は、凡俗な人間が、おのれが凡俗であることを知らないが、凡俗であることの権利を敢然と主張し、いたるところでそれを貫徹しようとするところにあるのである。」(二二―二二頁)

「つまり、凡庸人が自分は優秀であり凡庸ではないと信じているというのではなく、凡庸人が凡庸たることの権利、もしくは、権利としての凡庸さを宣言し、強行しているのである。」(九九頁)

それは哲学思想や人文社会科学の言葉に慣れた人々にとつては、ひどく素朴で空疎に思われるスローガンや決まり文句を延々連呼する人々の大群を自撃することで生まれた物言いであった。おおよそまじめに取り扱うに値しないような言説が、無数の人々に連呼されることによつて、社会の最重要課題であるかのように思われてくる。

そして、現にそうなつてしまうのである。オルテガのような人物にとつては信じがたい事態であった。しかも、事態はますます進行し、結果は二度目の世界大戦となった。それは端的に言えば「ヒトラー」と「スターリン」が雌雄を決する事態である。両者とも冷静な目で

眺めればありえないような空約束を連発するプロパガンダの集積物であり、しばしば幼稚であるという点でまじめな社会科学の研究対象ではない。ところが、そんな代物が多くの人々の心を捉え、二〇世紀の歴史を支配した。プロパガンダが繰り返されると、冷静で理性的な思考を身上とする人々ですらだまされてしまう。

しかし、そんな状況の下にあつても、オルテガのような人物は存在した。このことは、歴史主義、より正確には歴史相対主義に慣れた社会で、広い意味での「知識」に従事する人間にとつてかなり大きな救いである。「革命」だ、「民族」だと、同じようなことを連呼して街頭で暴れ回る群衆がいても、その種の人々に同化することなく独自の思考を守り通すことが、あるいは次にやつてくる事態を予見することが、一部の人物には可能であつたからである。

「歴史は予見しがたい、というのは嘘である。歴史は数えあげることでできないほどしばしば予言されてきた。もし未来が、予言の標的たりえないとすれば、その未来が現実となり、そして過去となつた場合ですら理解しえないであろう。歴史家は裏返しの予言者であるという考え方は、歴史哲学のすべてを要約している。予見しうるのは未来の一般的構造のみであるというのは事実だが、しかしその一般的構造こそ、われわれが、過去あるいは現在に関して理解しうる唯一のことでもあるのだ。」(七五頁)

歴史相対主義への反論は、『大衆の反逆』の基調の一つである。過去と現在と未来は別物であり、現在の基準で過去を評価したり、未来の可能性を束縛したりしてはならないというのが歴史相対主義であるならば、オルテガは「一般的構造」をそれに対置する。過去も現在も未来も、同じ人間が作り出している社会は、基本的に同一構造

なのだという理解である。そして、人間には過去についても未来についても、やはり現在についてと同じく「一般的構造」しか理解できないという。言い換えれば、一般的構造において幼稚な空約束は、過去でも未来でも、現在と同じく幼稚な空約束、空疎なプロパガンダでしかないというわけである。

興味をそそるのは、通説に反して、オルテガが「リベラル・デモクラシー」「自由主義的民主主義」を高く評価していることである。

「政治において、最も高度な共存への意志を示したのは自由主義的デモクラシーであつた。自由主義的デモクラシーは、隣人を尊重する決意を極端にまで発揮したものであり、「間接行動」の典型である。自由主義は、政治権利の原則であり、社会的権力は全能であるにもかかわらずその原則に従つて自分を制限し、自分を犠牲にしてまでも、自分が支配している国家の中に、その社会的権力、つまり、最も強い人々、大多数の人々と同じ考え方も感じ方もしない人々が生きていける場所を残すよう努めるのである。自由主義とは至上の寛容さなのである。われわれはこのことを特に今日忘れてはならない。それは、多数者が少数者に与える権利なのであり、したがつて、かつて地球上でできた最も気高い叫びなのである。自由主義は、敵との共存、それはばかりか弱い敵との共存の決意を表明する。人類がかくも美しく、かくも矛盾に満ち、かくも優雅で、かくも曲芸的で、かくも自然に反することに到着したということに信じがたいことである。したがつて、その同じ人類がたちまちそれを廃棄しようと思つたとしても別に驚くにはあたらない。自由主義を実際に行なうことはあまりにもむずかしく複雑なので、地上にしっかりと根を下ろしえないのである。」(二〇七頁)

しばしば繰り返される概説的な説明では、オルテガの『大衆の反逆』は、「貴族主義的大衆社会論」の代表的文献、あるいは集大成である

とされる。この種の論者は民主主義に批判的であり、「大衆」が支配する民主主義の外部にいる他者として、民主主義以前の伝統的社会的文化や社会制度を回復したいと考えているとされる。

ところが、実際には、オルテガは自由主義的民主主義が危機に陥っている状況を告発している。それは何もかも均一化しようとする「大衆」の強制力から少数者を守ろうとする立場が日ごと弱まってくる状況を指している。

「敵と共存する！ 反対者と共に政治を行なう！ かかる愛は、もはや理解されえないものになり始めているのではなからうか。今では反対派が存在している国がほとんどないという事実ほど、今日の様相を明確に示しているものはない。ほとんどすべての国において、同質的大衆が社会的権力の上のしかかり、反対派をことごとく圧迫し、抹殺している。大衆は——その密度とおびただしい数とを見れば誰にも明らかなことであるが——大衆でないものとの共存を望まない。いや大衆でないものに対して、死んでも死にきれないほどの憎しみを抱いているのである。」(一〇七—一〇八頁)

二〇世紀前半の歴史を振り返ると、第一次世界大戦の終結(一九一八年)から一九三〇年代の全体主義の興隆期以前の時期、世界的に「自由主義的民主主義」が勢力を持っていた時期がある。ドイツにおいては、名高い「ワイマール共和制」がこれに当てはまり、スペインでも、「スペイン第二共和政」の内戦に至るまでの時期に当たる。日本においても、いわゆる「大正デモクラシー」の時期である。日本の「昭和史」についてのごく普通の説明で語られるところでは、大正デモクラシー時代の政党政治が離合集散の党利党略政治に陥り、一般大衆の支持を失い、「軍部」の暴走を誘発して、数度のクー

デタを経て太平洋戦争に突入していったとされる。自党と支持者である財界の利権にしか興味を抱かない政党政治に愛想を尽かした一般大衆が、「昭和維新」を掲げる軍人の主張に共感したのだというわけである。

この種の説明を信じるならば、一九二〇年代から三〇年代にかけて広がりを見せた民主主義が、オルテガのいう「大衆の反逆」によって「圧迫」あるいは「抹殺」されたのだと解することもできよう。「隣人を尊重する決意」が次第に弱体化し、大声で絶叫するプロパガンダが前面に出てくる状況である。前世紀の知識人文化にみられた知的サロンは、街頭での「直接行動」に席を譲る。少数意見は抑圧され、少数者は迫害される。もちろん、このことは当時の「エリート」の人々の時代診断にもつながっていた。長年にわたって自分たちが培ってきた文化が失われてしまうのではないのかという意識である。

3. 西洋の没落か?

この本はオスヴァルト・シュペングラーの『西洋の没落』(一九一八/二二年)への反論として構想されている。シュペングラーの独特の循環史観的な歴史哲学を構想した大著は、その魅力的なタイトルの効果もあって当時国際的なベストセラーになった。一九世紀後半半頂に達したヨーロッパによる世界支配は、第一次世界大戦を直接の原因として自滅する。栄光の時代は終わり、長期にわたる衰退の時代がやってくる。

「われわれの時代は、頂点を極めた一時代に続く時代なのである。」

だからこそ、川の向こう岸、つまり、今過ぎ去ったばかりの充足せる時代に執着し、すべてをその時代の眼鏡で眺める人は、現代をあたたかも頂上からの転落、一つの没落であるかのように感じる蜃気楼に悩まされることであろう。(四一頁)

ヨーロッパの種々の領域で指摘されているように、ヨーロッパの十九世紀最後の数十年はまさに充実の時代であった。イタリヤやドイツのような小国分立地域が統一国民国家として再登場し、いわゆる「帝国主義」の競争に新規参入していく。さらに、未曾有の人口増大は、今日のヨーロッパ諸都市の外枠を形成した。たとえば、都市史や建築史を知る人々にとつては周知のように、ヨーロッパにあつて今日「古い町並み」で多くの観光客を集めている都市建造物の多くは、実は一九世紀後半の、いわゆる「歴史主義建築」である。それらは一八世紀以前の貴族文化を彷彿とさせる様式で建てられているが、実際には鉄筋コンクリートに石の外装を施したものである。それらはオリジナルの中世、ルネサンス建築とは比べものにならない物量である。もちろん建築の技術革新や量的増大は、人間を取り巻くあらゆる物質的生活の革新や増大の一環をなすものではない。ようするに、あらゆる点で過去とは比べものにならない偉大な進歩が達成されたと同時代の人々に感じられたのが、この時代であつた。すべてがそれまで信じられていた以上に増大したのである。もちろん、一八八五年にニーチェが『ツァラトゥストラ』を発表しているように、ごく少数の知識人がこの時代の危険について警鐘を鳴らしていたのは事実である。オルテガの次の一文にはまさにニーチェが共鳴している。

「すでに述べたごとく、「頂点の時代」が現実となるためには、何世紀にもわたつてあえぎながらも現実となる日をひたすら待ち望んできた願望が、ある時代ついに現実となることが基本的な条件である。そして事実、充足した時代というものは自己に満足していた時代ではあるが、時には、十九世紀のように満足を通り越してしまつていく場合もある。ところが、われわれは、そうした申し分なく充溢した自己満足の時代は、内面的に死んだ時代であることに気づくのである。真の生の充実、満足や達成や到着にあるのではない。セルバンテスは、かの昔に「宿屋よりも道中の方がよい」といつている。自己の願望、自己の理想を満足させた時代というものは、もはやそれ以上は何も望まないものであり、その願望の泉は涸れ果ててしまつていく。要するに、かのすばらしき頂点というものは、実は終末に他ならないのである。自己の願望を更新することを知らなかつたばかりに、幸運な雄の蜜蜂が新婚の空の旅を終えて死んでしまうように、満足の果てに死に絶えた時代もあるのである。」(四一―四二頁)

オルテガの『大衆の反逆』の特徴は、「大衆の時代」を批判しているから、かといつて先行する十九世紀以前の社会をほめ称えているわけではないということである。要するに、「昔は良かった」というようなある議論ではないのである。オルテガによると、「現代」はかつてなかつたほどに人間の生が向上した状態にある。以前の社会では、様々な制約の下で、「そうせざるをえない」状態で人々が生きていたのだが、二〇世紀前半(一九三〇年)に至つて、多くのヨーロッパ人が無限の可能性を手に入れた。過去の人々がおおよそ考えうるかぎり、ほとんどあらゆる事が可能な状況が生まれた。この意味で、多くの人々にとつて「過去」とは回帰する価値のない劣つた状態である。まさに進歩が時代の標語であり、過去は退歩でしかないからである。

ただし、無条件に「現代」を肯定するのかもしれない。ここにオルテガの意識するジレンマがある。つまり、現代の人々は過去よりもあらゆる点で優れているはずなのだが、しかし、人々は「大衆」になってしまったのである。つまり、過去の社会に暮らす人々は、自らの生が向上し、自由が獲得され、人々の選択肢が拡大すれば、あらゆる人間がより成熟した「市民」になると信じられていたのだが、実際には正反対の存在になってしまった。彼らは無限可能性をもちながら、実際に社会を支配していながら、現実には他人任せの人々であり、あらゆる手段をもちながら、実際には何も創造できない人々であるとみなされる。

そんな人々の暮らすヨーロッパ世界に、二〇世紀の初頭、印象的な予言が鳴り響く。「西洋の没落」である。つまり、未曾有の繁栄を誇り、個人の生活が今までなかったほどに可能性に満ちている現状にもかかわらず、多くの人々が「没落」を語る状況が生じている。過去の祖先たちが享受していたよりもはるかにたくさんの富を持っているながら、はるかに自由に暮らしていながら、人々は「没落」を声高に語る。

大衆は、オルテガの考えでは、進歩という約束——法則、趨勢、摂理——に対して反逆する。生が向上していながら、自由が増大していながら、依存的になる。選択肢が増大しながら、選ぶ能力を失う。もちろん、それらは「西洋の没落」という予言が根拠に乏しいように、根拠に乏しい。大衆は、各々自らの意のままに何でもできる絶頂期の人間なのである。しかし、彼らはそんなことは考えもしない。むしろ、自分たちが凡庸で何もできない状態に満足している。

まさに当時大勢のヨーロッパ知識人が「西洋の没落」という標語をもてはやしていたのと同じである。それは、自らの無力や依存、そして没落を語ることに満足する精神状態を物語っている。

「われわれは今日、平均化の時代に生きている。財産は均等化され、相異なつた社会層間の文化程度も平均化され、男女両性も接近しつつある。そればかりではなく、諸大陸も均等化しつつあるのである。ところで、ヨーロッパ人の生活水準は比較的低かつたのだから、この均等化によつてヨーロッパ人は得こそすれ損はしなかつた。したがつて、こうした側面から見た場合、大衆の反逆は、生命力と可能性の信じたいほどの増加を意味するものである。つまり、われわれがしばしば耳にする「西洋の没落」とは正反対の現象なのである。西洋の没落というのは、不明確で粗雑な表現であり、いったい何が没落したといっているのか、ヨーロッパ諸国家なのか、ヨーロッパ文化なのか、それとも、そうしたすべてのものの背後にある比較にならないほど重要なもの、つまり、ヨーロッパの生命力なのかが判然としないのである。ヨーロッパの諸国家と文化についてはまた後でふれるつもりだが、あの西洋の没落という表現は、この両者には当てはまるかもしれない。しかし、生命力に関するかぎり、そうした表現を用いることは、当然のことに許しがたい誤謬であることを確認しておく必要がある。わたしはシュペングラ―とは別の言いまわしを採用するが、たぶんその方がより説得力があるというか、より真実らしい響きをもつであろう。」(三三—三四頁)

当時すでに大衆は強い生命力を持っている。かつてないほどの生命力である。その強さのために、以前の社会では特権的な地位にあつた知識人も弱者の立場に追い込まれつつある。この意味で「西洋(ヨーロッパ)」は安泰である。没落するどころか、「ヨーロッパの生命力」はむしろ強化されているのだというわけである。

おもしろいのは、オルテガが強化された「ヨーロッパの生命力」

を、「すべてのものの背後にある比較にならないほど重要なもの」と見なしていることである。つまり、最重要の生命力はむしろ強化され、それは「生命力と可能性の信じがたいほどの増加」を意味しているのだが、なぜかオルテガが望むような形でそれらが生かされていない。それがまさに「大衆の反逆」なのである。皮肉な見方になるが、二〇世紀のヨーロッパは、第一次世界大戦で懲りずに再度の世界大戦を行なうほどの「生命力」を誇っていた。確かに、これほどの生命力は他の時代、他の地域の住民が知らない実績である。大衆の逆力がいかに強大なものであったのか、まさに史実が立証している。二〇世紀は、ヨーロッパが、まさに未曾有の生命力を発揮する世紀であり、「没落」どころか、ロシアやアメリカや日本までも巻き込んで世界を揺り動かしした時代であったということもできる。

ただし、本稿の関心は、「西洋の没落」が本当なのか否かという問題や、大衆が未曾有の「生命力」で「反逆」する事態を検証することではない。正直に言えば、一九三〇年のヨーロッパ知識人のそれと同じ関心を抱くことは困難である。むしろ、オルテガが行なっている議論が依拠している仕組みがいかなるものなのかということに興味移っているのである。つまり、この本が今日読み返してみても独特の「生命力」を保持しているのはなぜなのか。そもそも、オルテガが「大衆」という概念をどのように組み立てているのか。それは、言い換えれば、大衆の居場所をどのように特定しているのかという問題である。

4. 大衆の居場所は

大衆とは誰で、どこにいるのか。本稿の冒頭では、「大衆」を論じる場合に生じる自己言及性の問題を指摘しておいた。通説では、オルテガのような論者の議論は、他者として「大衆」を論じている。もちろんこれは間違いではない。「大衆が完全な社会的権力の座に登ったという事実」を指摘するオルテガ自身が大衆の一員であるならば、オルテガ自身も「権力の座」に座って大衆社会の社会問題を解決すればよいからである。仮にそれが不可能であるならば、自分の無能力を他者に押しつけているだけなのではないのかということになってしまふからである。ただし、オルテガが指し示す「大衆」というのは、オルテガ自身からそれほど遠いところに住んでいる人々でもないことを忘れてはならない。

「わたしが冒頭であらかじめ断ったように、「大衆」とは特に労働者を意味するものではない。わたしのいう大衆とは一つの社会層を指すのではなく、今日あらゆる社会層の中に現われており、したがって、われわれの時代を代表するとともに、われわれの時代を支配しているような人間の種類あるいは人間のあり方を指しているのである。大衆がわれわれの時代を支配していることを、われわれは以下の考察において、必要以上に明確に見ることができよう。」（一五四―一五五頁）

それでは、オルテガにとって他者である「大衆」は、いったいどこにいるのだろうか。あらゆる社会層にいるとされる「大衆」は、それぞれ具体的に何をやって暮らしているのだろうか。上記の引用の後、次のようにつづいている。

「今日、社会的権力を行使しているのは誰であろうか、また時代に自分の精神構造を押しつけているのは誰であろうか。それは疑いもなくブルジョアジーである。それでは、そのブルジョワジーの中で、最も優れたグループ、つまり今日の貴族とみなされているのは誰であろうか。それは疑いなく専門家、つまり、技師、医者、政治家、教師等々である。それではこの専門家のグループの中で、最も高度にそして最も純粋に専門家であるのは誰であろうか。それは疑いもなく、科学者である。地球以外の天体にすむ者が、ヨーロッパを訪問し、ヨーロッパを評価するためには、ヨーロッパに住んでいる人間のうちでどういうタイプの人間に会ったらよいかとたずねたでしょう。ヨーロッパは完備として科学者を指し、自分に対して好意的な評価が下されることを信じて疑わないことであろう。他の天体から来た者がたずねているのは、例外的な個々人ではなく、通則、つまり、ヨーロッパ人種の頂点である「科学者」という一般的なタイプであることはもちろんである。

ところで、その結果は、今日の科学者こそ、大衆人の典型だということになるのである。しかもそれは、偶然からでもなければ、個々の科学者の個人的欠陥からでもなく、実は科学——文明の根源——そのものが、科学者を自動的に大衆人にかえてしまうからなのである。つまり、科学者を近代の未開人、近代の野蛮人にしてしまうからなのである。」(一五五頁)

引用が長くつづいてしまったが、オルテガの論旨は当人の言葉で説明してもらおう方が明瞭になるように思われたからである。

オルテガの考えでは、オルテガ自身も含む専門家、知識人、とりわけ「科学者」こそが大衆人の典型なのである。大衆とは「自分自身の存在を指導することもできなければ、また指導すべきでもなく、ましてや社会を支配統治するなど及びもつかない」人々である。そして、科学者が大衆の典型である理由は、その極度に発展した分業

化にある。世代を追うごとに分業化を進展していく科学者は、時代を経るごとに視野が狭小化し、世間一般の人々から見れば「専門領域」に含まれるはずの問題にすら関心を抱かない¹⁰。しかも、この種の科学者は「自分が専門に研究している狭い領域に属さないといったことを知らないことを美德と公言し、総合的知識に対する興味をディレッタンティズムと呼ぶまでに」(一五七頁)なっている。専門外についてあえて無知であることを誇る専門家の姿勢、そしてそれをもてはやす文化が発生する。結果として、自分のせまい専門領域以外には知識も関心もない人々、ようするに自分がやっていることの意味がわかっていない人々が、「最も高度にそして最も純粋に専門家」として、社会全体の今後を決定する場に参加する。まさに「この事実、ヨーロッパが今日、民族や文化が遭遇しうる最大の危機に直面していることを意味している」というのが、オルテガの考えである。

このような議論に出会うと、いわゆる「文系」に属する人間は、「理系」の人々が陥っている専門分化、あるいは「専門バカ」化に対してある種の感慨を抱くものかもしれない。ただし、事態は文系に就いてもたいして変わらない。ガリレオ以来、あるいは一八世紀以来大成功を収めてきた自然科学にあこがれる文系——人文・社会科学——の研究者は、自然科学(理系)に未曾有の成功をもたらした実証主義を積極的に取り入れようと努力してきた。それらは、文系の学問でもしばしば登場する「科学」という言葉に象徴される。研究者から特権的に切り離された形で研究することこそが、「客観性」であり、客観性こそが、個々人の主観に依存する神話や、文学や、哲学

や、思弁から「科学」を区別する指標であるとされる。実証主義を掲げる文系の学問にとつて、研究者というのは約束上存在しない黒子であり、そこに登場する多数の人々の行動に影響を与えてはならないとされる。経済学も、法律学も、政治学も、社会学も、いわば不偏不党の客観性を実現しなければならず、研究対象である「経済」や「法律」や「政治」や「社会」を構成する無数の人々に影響を与えてはならないし、影響を与えられてはならないとされる。

同じ人間である研究者が、研究対象の人々によって日々刻々作り出されている「社会」と切り離されたままで研究するなどということができるのかという問いは、この場合無視される。そんなことがいったいどうやって可能なのか。普通に社会生活を送る普通の人間にとつて、これはかなり根本的な疑問でありうるにちがいない。

ところが、実証主義を掲げる人文・社会科学は、この種の疑問を無視してきた。この場合前提となっているのは、専門知識を持たない人々、要するに非専門家の人々が、高度に専門的な問題に口を出すべきではないという考えである。人類最高の知識や最良の方策は、すでに「科学者」の手中にあり、一般の人間は彼ら選良の打ち出す対策に一糸乱れず全力で取り組めばそれによいのだということになる。

ただし、極度に専門分化した科学者には、自分たちがやっていることの広範にわたる意味を理解するための見識もなければ、見識を得ようという意図も欠けている。オルテガによれば、科学者は、自分の専門領域以外のことに関心を持たないことに、恥よりも、むしろ誇りを感じる人々だからである。彼らは自分の狭い専門領域の内

部で勤勉に働き、その結果に責任を持たない。最新最良の科学技術を探究開発するならば、その結果生じた廃棄物の処理や、それらが及ぼす健康被害などはどうでもよいと考えている。より正確に言えば、彼らはそういった問題を知らないのである。廃棄物は廃棄物の処理の専門家、健康被害は健康被害の専門家（医者）に任せればよいと信じているからである。

本稿ではすでに、科学者が「新しい賤民」になってしまったのだとオルテガが論じているのを引用してきた。「真理の探究」という崇高な任務から離れ、金（研究費）と引き替えに戦争や巨大国策事業に奉仕するだけの存在になってしまった人々のことである。彼らは「指導されるべき人々」であつて、「指導すべき存在」ではない。自分では何も決められない家畜の群れのような存在である。そもそも、「真理の探究」というのは本来、全人類をより幸福な状態、より高度な知的次元に到達させるための事業だつた。ところが、専門分化した科学者は、結果として、しばしば人類を不幸にし、被害を与え、科学者自身がより低い知的水準に陥っていく。そして「科学者」という名の大衆が、社会を支配し、「学識経験者」として社会全体の意志決定に参画していく。まさに大衆支配である。

こうして本稿の議論は、著者であるオルテガ自身の意図を離れて『大衆の反逆』を読んでいく作業に入っていく。それは自分がやっていることの意味を知らない無数の専門家が社会を動かしている事態をいかに捉えるのかという課題でもある。さらにいえば、『大衆の反逆』に登場する「大衆」を、「専門家」と読み替えて読んでいく作業といつてもよいのかもしれない。

すると、本稿でここまで観察してきた「大衆」の種々の性質を、今日の世界において一層身に迫った事態として理解することができ。それはオルテガ自身が最も身近な場所にいる「専門家」たちを理解する論理として『大衆の反逆』を読んでいくことである。つまり、自ら人類最高の知性を代表していると自称する人々が、実は知性を裏切り、自らの手に負えない災害を社会全体に押しつけている事態である。しかも、繰り返しになるが、複雑に構築された巨大な業体制に属する当人たちは、自分がやっていることの意味が理解できていない。個々の専門家たちは、先行者や同業者が近づけてきたことを自分もやっているだけであり、自分としてはするべきことを誠心誠意やってきたと信じている。何一つやましいことはなく、私利私欲をむさぼった記憶もなく、むしろ全体社会に奉仕するまじめな職業人生を送ってきたと信じている。彼らは「大衆」、つまり、いわれたことを素直にやり、それ以外のことに興味を感じない人々である。ところが、そんな人々のやったことが無数に集積すると、全体として社会に害を及ぼすことがある。まさにそれは複雑に構築された巨大な業体制、少し昔の社会科学が美称として「システム」と呼んだ巨大な人間機械が、それを必要としてきた人間社会全体の災いとなる可能性である。

このように考えてくると、オルテガの議論は、オルテガ自身を含んだ「知識人」あるいは、「専門家」への自己言及の論理として読むことができるようになる。知識人と専門家は、こうして自らの論理の対象として呼び戻されるのである。それは、十九世紀の哲学が「弁証法」と呼んだ過程と似ている。特定の社会規範が極大化し、大き

な組織が生まれ、肥大化し、元来の意図や役割を離れ、組織そのものを保持していくことこそが最優先課題となる。結果、創業者たちが思いもしなかった「予想外の結果」が生じる。組織の外部の人々は、「組織の墮落」と呼ぶのだが、組織内の人々は、多くの場合「墮落」を感じてはいない。

そして、大きな事件が起こり、たまたま組織内の少数者が責任を問われると、彼らは決まって、「自分は命令に従っただけだ」、あるいは「自分が属している組織では」誰もがあつていただけだ」と主張する。当人の意識の次元で、おそらく嘘はない。誰もが善意で奉仕して、巨大な厄災が生じる。それは自らを精神貴族と考えていたオルテガにとっては心外な解釈なのかもしれない。

「生が経験した具体的な可能性の増大のすべては、ヨーロッパの運命に突如おそいかかってきた最も恐ろしい問題につき当たり、自ら墓穴を掘る結果になリかねない危険に直面している。その最も恐ろしい問題とは、ここでもう一度要約してみれば、文明の諸原理になんらの関心をもたないタイプの人間が社会的指導権を掌握してしまったということである。彼はたとえこの文明の諸原理とかあの文明の諸原理に関心をもたないというのではなく——今日判断しうるかぎりにおいては——いかなる文明の諸原理に関心をもたないものである。」(一一二—一一三頁)

多少深く読み込んでいくならば、オルテガの文章にあらわれている悲観的な印象は、最も身近な人々が実は最も典型的な「大衆」であるという現状認識に基づいているといえる。

それは本稿の冒頭で論じてきた問題がオルテガに独自の論点を介して回帰してくることもある。すなわち、「大衆」を論じる論者は

自分自身を大衆からいかに区別するのかという問題である。もちろんオルテガ自身は自分が「大衆」の一員であるなどとは思っていない。しかし、その一方で、オルテガにとつてずいぶん近いところに「大衆」は生活している。つまり、大半の知識人や学識経験者が、「専門家」となり、オルテガがいう「哲学者」あるいは「貴族」からますます遠のいていく。社会を支配している人々が、「文明の諸原理」について思索をめぐらすといった役割を果たさなくなっていく状況のことである。言い換えれば、『大衆の反逆』は二〇世紀初頭の段階でのヨーロッパ知識人による自己言及の試みとして読むこともできる。つまり自分自身が「貴族」でも「哲学者」でもなく、「専門家」という名の「大衆」に移行せざるを得ない状況を論じているのである。

こうして、通説にいわれる議論と『大衆の反逆』の相違が見えてくる。オルテガが論じているのは、素朴な意味での貴族主義的大衆論でもなければ、大衆の立場から古い貴族文化を克服しようという議論でもなく、貴族主義の外見を保ちながらも実際には大衆化しつつある知識人の自己言及の試みなのである。まさにこれこそが、オルテガのこの本が、刊行以来八十年を経ていまだに生々しい迫力を伴っている原因なのではないだろうか。

（二〇一一年六月二十一日）

1 本稿は、二〇一〇年度の北海学園大学経済学部犬飼ゼミの課題に出発している。ゼミでは課題としてオルテガ『大衆の反逆』を一年かけて詳細に検討した。その過程で出てきた論点をまとめるのが本稿の課

題である。末尾に受講生のレポートを収録する。

2 社会学者の稲上毅が『現代社会学事典』（北川隆吉編、有信堂一九八四年）の項目「現代社会学論」で行なっている整理が、社会学が「大衆社会学」とどのような形で応対してきたのかを理解する上で示唆的である。稲上によると、大衆社会学は二類型に分類できる。一つは、「貴族主義的」大衆社会学で、もう一つは、「民主主義的」大衆社会学である。両者違いは大衆社会と民主主義の評価にある。前者はエリート主義的で、古来の高貴な文化が凋落し、大衆の低下文化が勃興する状況を非難する。文化的な背景としては、主にカトリック系の伝統主義がある。もちろん、その集大成にあたるのがオルテガの『大衆の反逆』である。これに対して後者は、「民主主義の陣営に身をおき」、前者のエリート主義への告発、非難を基調とする。こちらの背景は、英米社会の民主主義であり、英米民主主義の立場に立ったファシズム論もこの中に分類される。また、アメリカ社会学で論じるところの「産業化の理論」や「収斂理論」とも深くつながっている。

ただし、二つの類型は人的にもはっきりと分かれるのかといえば、そうではなくて、同一人物に両者が共存し、時系列的に移行していく場合もある。稲上の挙げている例をそのまま用いるならば、元来は大陸ヨーロッパのエリート文化の色彩を濃厚に受け継ぎながら、亡命先のイギリスにおいて民主主義的な理論に移行したカール・マンハイム、あるいは民主主義の先進地とみなすアメリカ合衆国にわたって同国の制度を研究する中で、大衆社会の病理を克服するために知識人の役割の重要さを強調するようになったフランス貴族出身のアレクシス・ド・トクヴィルのような事例がある。

また、稲上の整理が興味を引くのは、大衆社会学に共通する基本性格として、マルクス主義と共通の「クラス・モデル」に依拠している点と指摘している点である。ここでいう「クラス・モデル」（あるいは「マシーエリート・モデル」というのは、「富、権力、威信等が特定の特権の階層や少数の人びとに偏在的に分配されている一方、他の階層や人びとのあいだではそれが比較的均等化している」という想定のことである。そして、後者を、「総称的に大衆と呼ぶのがふさわしい」とい

う。そして、ここから稲上は、マルクス主義と大衆社会論の相関性を示唆する。

この問題は、おそらく稲上が考えている以上に重要な論点につながっている。すなわち、特定の社会をなんらか基準による不平等によって二分割し、「持てる者(資本家)」と「もたざる者(労働者)」あるいは「選良(エリート)」と庶民(大衆)」といった形で説明する思考様式がもたらす様々な帰結である。この種の二項対立的な思考をする人々は、ほとんど無意識の形で二分割した一方を優れた存在、他方を劣った存在として考える傾向をもつ。それは人間の言語に不可分の形で組み込まれた「善悪」や「優劣」や「好悪」や「大小」といった二項対立的判断が、言語を用いて思考する人々に半ば強制しているともいえる。人は、通常言語を使って思考していると自覚しているのだが、実際には特定の構造をもった言語表現によって思考させられているからである。ただし、ここではこの点を指摘するにとどめたい。

3 自己言及性の問題は、次の近著で集中的に取り上げたので参照されたい。拙著『方法的個人主義の行方 自己言及社会』、勁草書房二〇一一年。

4 このことは社会をめぐる学問——とりわけ社会学——にとつて困難な問題突きつけることになる。それは、「大衆」という概念は、果たして今後も学問的な議論に用いることができるのかという問いである。角度を変えていえば、「大衆」が自己言及命題でしかなくなつた場合、科学として無意味になつてしまふのではないのかということである。つまり、「私は大衆の一員である」と称する人物が、「大衆は……である」という命題を展開したとしても、結局のところ「私は……である」といつているにすぎない。もしもそうならば、「私は嘘をついてる」という命題が科学的に論証不可能であるのと同じく、たとえば、「大衆は社会情勢の変化に鋭敏である」といった命題も、科学にとつて無意味であるということになる。

現に、今日の社会学で「大衆社会」はあまり登場しない概念になりつつある。たとえば、日本全国の主に大学図書館の目録を網羅した国立情報学研究所の検索サイトNACSISで「大衆社会」という語を

表題に含む書籍を検索すると、この言葉が一九五〇年代に盛んに用いられており(代表例が、福武直・日高六郎・高橋徹共編『講座社会学第七卷 大衆社会』、東京大学出版会一九五七年)、後には、社会学の専門文献から姿をほとんど消すことがわかる。用いられたとしても括弧入りの「大衆社会」であり、以前に用いられていた用語法に対する著者自身の距離を暗示している(たとえば、後藤道夫『収縮する日本型「大衆社会」・経済グローバルズムと国民の分裂』、旬報社二〇〇一年)。参照元：NACSIS Webcat : <http://webcat.nii.ac.jp/webcat.html>

この種の現象について「原因」を特定することはできない。ただし、一九五〇年代の社会学者と今日の社会学者の違いを感じさせる。少なくとも社会学の専門研究者が自分自身と切り離された「大衆社会」を上から目線で論じるという立ち位置が次第に困難になつていく様子を想像することはできないだろうか。

5 この言葉についてはしばしば出典として示されるのは、『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」八―一二の次の一文である。「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」ただし、この思想をキリスト教だけに帰することはできない。それは、古代ギリシアの思想にも起源を求めることができるからである。そもそも、「哲学」というのは、古代のギリシア人にとつて奴隷ではない「自由人」の知の営みであった。

6 社会の必要から自由な「神の小鳥」という比喩は、キリスト教圏ではかなりよく知られた定型表現で、出典は新約聖書に登場する「山上の説教」のなかの「思い悩むな」である。労働することも、生活について悩むこともない「小鳥」ですら創造者である神は豊かに養っている。また、小鳥は労働せず、心配もしないがゆえに自由であるともいえる。

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲むのかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も時かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。

だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだが、思い悩んだからといって、寿命をわずかも延ばすことができようか。」
『マタイ伝』六・二五―二六

つまり、哲学者は大衆社会の必要性に自分から背を向けることで、「神の小鳥」の自由を手に入れているのだということになる。

7 勤労者の利益のために国家がもっている権力を各種の組合に移行しようとするサンディカリズム(組合主義 syndicalism)が、スペインにおいて無政府主義(アナキズム)と合体したアナルコサンディカリズムとして力をもったことはよく知られている。

8 註2 稲上による分類を参照。
9 「西洋の没落」という表題は、しばしば誤解を招く。原題は *Der Untergang des Abendlandes* で、*Abendland* (夕刻の国) というのは、

ユーラシア大陸の西端に位置する西ヨーロッパのことである。日が最後に沈む日没の国が、繁栄の末に没落するのだといえ、ドイツ語の原題が含んでいる情緒的な表現は理解できるだろう。そこには、古来の先進地域である西ヨーロッパが落日を迎え、日の出の勢いのアメリカやロシアといった新興地域が支配権を握るといふ含意がある。これに対して、日本語訳の「西洋」というのは、アメリカやロシアも含んでしまう。ここから非西洋に属する日本の読者が、独自の思い入れを投入する可能性も出てくる。

10 同所でオルテガは次のように書いている。

「ところが、彼ら「科学者たち」は自分たちの狭い視野の中に閉じこもりながら、現実には、新しい事実を発見し、彼らがほとんど知らない彼らの科学「人類全体の知の体系としての科学のこと」を発展させ、それによって、彼らが意識的に知らない思想の総体を発展させたのである。いったいどうしてこんなことが可能だったのであり、また現に可能なのだろうか。ここで、次のような否定しえない奇怪な事実を強調しなくてはならない。すなわち、実験科学の発展は、その大部分が驚くほど凡庸な人間、さらには凡庸以下の人間の働きによるものであったということである。つまり、今日の文明の根源であり象徴であ

る近代科学は、知的に優れていない人間をも歓迎し、彼が立派に働くことを可能にしたということである。それを可能にした原因は、新しい科学とその新しい科学が指導し代表している全文明の最大の利点でもあり同時に最大の危険でもあるもの、つまり、機械化にある。物理学や生物学において行なわねばならないことの大部分は、機械的な脳労働であり、それは誰にでも、あるいはそれ以下の者にできる仕事なのである。科学を小さな断片に分割し、その一片の中に閉じこめて他をいつさいかえりみないというやり方をとれば、無数の研究分野が生まれてくる。方法の正確さと確実さが、こうした知識の一次的・実際のな分割を可能にする。研究者はそれらの方法の一つを機械のようになややつて仕事をすればよいのであり、それらの方法の意味や根拠を厳密に知らなくても、きわめて豊富な結果を得ることができるのである。かくして、科学者の大部分は、巣箱の蜂窩にいる蜂のように、また溶鉱炉の地下室に入った火夫のように自分の研究室の小さな一室に閉じこもったままで、科学全体の進歩を後押ししているのである。」
(二五七―二五八頁)

受講生レポート

栃本宏和

オルテガの『大衆の反逆』を読んで、今回のレポートに自分なりに大衆についての考えをまとめる。

この『大衆の反逆』は、人々が集まって「大衆」となり、大衆が社会的権力を握ったことによって、社会が衰退することを危惧している内容となっている。この場合の大衆は、平均人とも表されている。また彼らは、「前世紀の人間よりも遙かに健全で強靱な精神を持つているのは事実だが、しかしその精神ははるかに単純」(七〇頁)である。そして彼ら大衆が、これからの社会の発展に対して害悪とみなしており、彼らが社会の衰退を招くと表している。

大衆人の考えについて、オルテガは、「大衆人とは生の計画をもたない人間であり、波のまにまに漂う人間である。したがって、彼の可能性と彼の権力がいかに巨大であっても、何も建設することがないのである。」(六七―六八頁)、「彼は自分自身凡庸であることを自覚しつつ、凡庸たることの権利を主張し、自分より高い次元からの示唆に耳をかすことを拒否している」(一九二頁)というように、大衆人に対して非常に厳しく批判している。そして、彼らが支配者に反抗して支配権を掌握したところで、新しく規律を作ることでもできずに、ただただだらだらと時間をつぶすだけになってしまうと述べている。

このオルテガの主張は、平凡だから居直るということを表しているという点で、自分にとってかなり印象に残っている。しかし、この主張では、大衆人は悪者であるから、すぐに排除しなければならぬものだ、とも捉えることができるのではなからうか。実際に、大衆人自体にそこまで悪い部分はないと思える。「生の計画」を持たないことが大衆人であるならば、この場合の生の計画とは、一体何なのであろうか、疑問である。

かくして、オルテガは大衆による政治を、「残酷な大衆支配」と呼び、大衆がつけあがるような社会を否定している。ここでの大衆支配を、現代の民主制の政治と思いついてみると、たしかに現代の我々の民主制にも欠点はある。しかしながら、大衆の意思を反映しない政治もまた恐ろしいものではなからうか。ヒトラーのような選挙によって国民によって選ばれた独裁者もいるが、「パンがなければお菓子を食べればよい」と言い放った王妃のように、愚かな独裁者や王様などの理不尽な独裁政治を終結させるべく、民衆が一致団結して革命を起こすこともあるのだから、民主制が完璧とまでは言えないが、大衆支配をはっきりと否定することはできないのである。

このように、オルテガにより人間の大衆人化が問題となっているが、人々が大衆人化することは必然的であると思える。

大衆化のプロセスについては、歴史が進むにつれて、それ以前より生活水準が高まり、一昔前までは特権的な人々しか利用できなかった設備が全ての人々に行き渡るようになった。人々の財産や文化も平均化された。生の水準が上がると、人々の可能性が開けたのである。この現象をもたらしたのは民主主義や近代化、大量消費社会

の到来である。これにより人々を豊かにさせ、分をわきまえればそれなりの生活ができるはずである。そうして、人々は自らの暮らしに満足するか、もしくはそのような暇がないために、より高度な社会を形成することを全く考えず、大衆人はこれからの社会の発展を丸投げしてしまう。

以上の大衆人の問題の解決には、オルテガは、貴族たることが大衆化を抜け出すとし、「常に自己を超克し、おのれの義務としおのれに対する要求として強く自覚しているものにむかって、既成の自己を超えてゆく態度をもっている勇敢な生の同義語」（九一頁）と述べている。貴族とは、自らに多くの高度な要求を自らに課し努力する人のことを表し、他の人々と同一であるということに喜びを見出すような大衆人とは異なる存在である。

ここで、貴族は努力すると表現されているが、この場合において、「自己の超克」、「勇敢な生」のための努力とは、具体的には何をどのように努力をしなければならないのだろうか。スポーツや政治などにおいてのプロフェッショナルと呼ばれるための努力であろうか。それならばプロ野球の選手や科学の専門家は高貴な人と表わされるが、彼らを大衆人と呼べないとも言えないだろう。さらに、普通の人々になることを恐れ、ただ普通よりも抜きんでたいただけに、何らかの努力をすることが、自らに義務を課す高貴な人と呼べるのだろうか。例えば、普通の人とはなりたくないために、奇行蛮行に走る努力をする人は、大衆人ではないにしても、決して高貴な人とは呼べないだろう。

オルテガは、ここまで大衆批判を繰り返してきた。オルテガの時

代と現代の社会の構造の違いはあるが、現代の大衆のあり方を説明すると、現代では社会が豊かになりつつあるが、テレビなどのマスメディアは不況や経済危機についての報道を繰り返しているため、これからまともに暮らしてゆけるのだろうかという、人々の先行き不安をおおっているように感じる。そして人々は、向上心を失い、他の人々と同じ生活ができればよいと考え、大衆化が進むのである。これからの社会では、ますます大衆化が進み、オルテガの望む大衆化の解消は不可能であると考ええる。

梶原 亮

この一年間ゼミを通して「大衆の反逆」を読んできて、自分が興味を抱いた箇所があった。第十四章「世界を支配しているのは誰か」の第五節である。そこでは、「ヨーロッパの没落」ということが述べられている。筆者オルテガは今日の「ヨーロッパの没落」を大まかに定義しようとして見出しうるたつた一つの大きな要因は「ヨーロッパ諸国民のそれぞれが直面しているもろもろの経済的な問題の総体だけである」と述べている。この当時のドイツ、フランス、イギリスの経済にとつての致命的な障壁とは、それぞれの国家の政治的国境だと筆者は考えている。確かにこの点についてよく考えてみれば、この当時ヨーロッパのそれぞれの国が、自国内だけでの経済活動に閉じこもっていた背景があったので後のEU発足に繋がっていったのではないかと自分は感じた。第二次世界大戦後西ヨーロッパは戦後復興のために米国国務長官マーシャルが提案した

マーシャルプランを受け入れて一九四八年四月に西欧十六か国でヨーロッパ経済協力機構(OEEC)を結成した。また十年後にはヨーロッパ経済共同体(EEC)が結成された。この組織は経済統合の対象をすべての製品・サービスに拡大し、なかでも農業生産は参加各国の差が大きく、困難に直面していたが発展し、ヨーロッパ統合の基礎をつくった。一九六七年七月にヨーロッパ共同体(EEC)が発足した。この組織では、経済のみならず政治面も視野に入れてより広い分野での統合を目指した。オルテガは、この章でヨーロッパの経済分野だけではなく政治面も批判しており、ヨーロッパ人が自分が登録され閉じ込められている国民国家に希望を抱かなくなってしまう、国家は尊重されなくなってしまう国家はあまりにも小さくなってしまうと指摘していた。だがこのEECが発足したことによりあらゆる分野が自国内だけに留まらず国境という壁を越えていきかうことによりヨーロッパは一つの共同体として生まれ変わった。一九九二年二月、EC加盟国がオランダの地方都市マーストリヒトで欧州連合の推進を目的とするマーストリヒト条約を採択した。この条約では、経済・通貨・政治の面での統合をさらに進め、国家主権の一部をEUに譲り渡す道筋まで定めた。そして、一九九三年十一月にはヨーロッパ連合(EU)が発足し共通市民権の導入、欧州議会の権限強化により、ヨーロッパ統合はさらに深化した。また一九九九年に一部を除くEU加盟国でユーロという共通通貨が使用され始めた。ユーロには硬貨と紙幣があるが、このうちユーロ紙幣では表側はヨーロッパの歴史的建築遺産を表す架空の建造物、裏側は建築史上のある時代を象徴する橋をデザインしている。建物は

窓と門を大きく描いて開放性と協力の精神を、橋はヨーロッパの市民同士、またヨーロッパと他の地域とのコミュニケーションを象徴している。この章でオルテガはヨーロッパ人は経済、政治、知性の各面の計画において初めて自国という限界に突き当たってみて、自己の可能性、生の様式が自分が閉じ込められている集団の大きさと比較にならないほど大きなものであると指摘していた。だが今こうしてEUという組織が設立したことにより、加盟国同士が国境という壁を越えて、たがいに協力しあうことにより、ヨーロッパは一つの集合体としてまとまった。つまりヨーロッパは自己を超越したといえるのではないだろうか。以上述べたことから結論を言うと、私はこの章でオルテガはヨーロッパは自国内だけでは限界を感じたからこそヨーロッパは一つにまとまる必要があることをヨーロッパの国々に伝えたかったのではないかと思った。